

赤馬あかまが関懐古せきかいこ（菅かん 茶山ちやざん）

蜃雨たんう 茫々ぼうぼうたり 海上かいじょうの 村むら

水浜すいひん 何れいずの 処ところか 英魂えいこんを 問とわん

祇ただ 聞きく 波底はていに 皇居こうきよ 在あるを

誰たれか 信しんぜん 人間じんかんに 老仏ろうぶつの 存ぞんするを

鷓首げしゆ 還かえらず 楚沢そたくを 悲かなしみ

鵬程ほうてい 際かぎり 無なく 厓門がいもんに 接せつす

腥風せいふう 吹断すいだんす 篷窓ほうそうの 夢ゆめ

島樹とうじゆ 汀雲ていうん 鬼氣きき 昏くらし

蜃雨茫々海上村 水濱何處問英魂
祇聞波底皇居在 誰信人間老仏存
鷓首不還悲楚澤 鵬程無際接厓門
腥風吹断篷窓夢 島樹汀雲鬼氣昏

解説 作者が赤間が関に旅した時の作。

語釈 ※蜃雨Ⅱ漁師の里に降る雨。※茫々Ⅱ果てしなく広がるさま。※海上村Ⅱ海のほとりの村。※水浜Ⅱ壇之浦の水辺。※何処Ⅱどの場所に。※英魂Ⅱ戦死した英雄たちの魂。※波底皇居Ⅱ波の底にある皇居。※誰信Ⅱ老仏の伝説を誰が信じようかの意。※人間Ⅱ人の住む所。※老仏Ⅱ安徳帝が身をかくした時の仮の名。※鷓首Ⅱ美しい船。※悲楚沢Ⅱ楚の沼沢の不幸を悲しむ。ここでは安徳天皇が壇之浦で水死した不幸に重ねて用いた。※鵬程Ⅱ鵬が飛ぶ里程。一飛びすれば九万里という。※無際Ⅱ果てがなく。※接厓門Ⅱ厓門の故事にまでつながる。厓門は厓山という山で、張世傑、陸秀夫らがこの山にこもり、元将張弘範に攻められ、帝の衛王は陸秀夫に背負われて入水した。安徳帝の故事と対比される。※腥風Ⅱなまぐさい風。※吹断Ⅱ風が強く吹く。※篷窓夢Ⅱ船中で結ぶ夢。※汀雲Ⅱ水ぎわの雲。※鬼氣昏Ⅱ死霊の気がたちこめて昏い。

通釈 漁村の海浜に降る雨は茫々と一面に広がり、水辺のどこに平家一門の英雄たちの魂を求め弔うことが出来ようか。むなしく波の底の皇居があると聞き伝えるのみであり、明の建文帝が逃れて老仏と名をかえ、市井にかくれていた伝説と同じく、安徳帝が人間に身をかくされたという故事は信じることは出来ない。周の昭王の鷓首の船の帰還しなかつた楚の沼沢の故事も悲しいことであり、懐いは遠く、宋の幼帝が厓門で入水した伝説にはせ、安徳帝の悲運がしのばれる。なまぐさい風が吹いて、舟中旅泊の夢も断ち切られ、われに戻ると、島の樹木や水ぎわの雲の中に鬼氣がたちこめている。